

大学放浪記 (34)

伊藤信孝

マエジョ大学客員教授・再生可能エネルギー学部

本報では大学を移って、驚くほど研究論文を書いている著名な国際学術誌に投稿、受理され、掲載されている教員について紹介する。タイに限らず、大学の評価のひとつに世界でのランキング、或いはその国内でのランキングなどがその例として用いられる。もちろん Times が定期的に発表する世界の大学ランキングのみが評価で無いことは言うまでもないが、評価のひとつである事には変わりはない。タイでの大学ランキングで殆ど毎回上位を占め、1, 2位を占めている大学はマヒドン大学、チュラロンコン大学である、この2つの大学は常に1, 2位を争う関係にあるが、第3位につける大学がチェンマイ大学であったりカセサート大学であったり、あるいはコンケン大学であったりで、はっきりしていない。と言う事は1位、2位は常にマヒドン、チュラロンコンのいずれかであり、この両大学が首位を争っているが、2位と3位の間には大きな差があり、3位には5~10の大学が、わずかの差でひしめき合っていると考えられる。もちろん大学の専門により農学が強いとか工学が強いとか、得手不得手により差があり、総合的な評価としては3位のグループから抜け出せない状況にあるとも考えられる。マエジョ大学は、かつて日本でも農業に対する教育、研究、技術に焦点を当てた高等農林が設置されたと同じような背景で創立された大学のひとつであり、歴史的にも古い背景をも持つ。2023年に創立90周年を迎えるが、国立大学で初めて首都バンコック以外に創設されたチェンマイ大学よりも歴史は古い。当然農業に特化した専門教育、研究が中心に創設されたことから、チェンマイ大学に比して学部数も少ない。この大学がタイ国内でどの様なランキングにあるかは、情報により一定しておらず定かではないが、こちらに移籍して驚いたことのひとつに「極めて研究論文の掲載数が飛び抜けて顕著である人物を紹介しておく。教員の評価は、投稿、受理、掲載された研究論文がどの程度、著名でインパクト・ファクターの高い国際学術誌に掲載されたかで成されるのが一般的である。最近では大学教員の採用には最近5年間で、評価基準の条件を満たした学術誌に3編以上が条件となっている。もちろんタイの全ての大学がこの条件を適用しているかどうかは定かではない。しかし最近5年間で3編という条件はそれほど難しい事ではないが、評価基準を満たす国際学術誌となると一般には難しい、厳しいと言うところであろうか。そこで本報では「極めて顕著に学術活動を継続している」教員の一人を紹介する。本人からも聞いてはいるが、年間20編の研究論文を著名な学術誌に投稿、掲載しているという。まさに驚きである。このような話を聞くと多くの教員はその多さに驚き、いったいどの様な論文をどの様な学術誌に掲載しているのかと容易に信じないのが普通で有る。筆者も耳に為るときは、でも実際に見て見ないと言う控えめな思いであった。時代も替わり情報化時代になって、論文投稿は殆どがオンラインにな

り、正確な英文を書き、正確な英語を話すだけの英語力はもちろんインターネットへのアクセス、掲載までの頻繁な英語でのやりとりや受け答えなど、学術活動の環境も大幅に変わった。本来、研究に集中し、中身の濃い研究、オリジナルなアイデアで満ちた研究を書くことが研究活動の主軸であったが、今の時代ではその研究を広く社会に公表するために付加的な作業を余分にするための知識が必要である。学術誌毎にフォーマットが異なるので参考文献のリスト様式も異なり、その都度違った様式での入力が必要になる。英語そのものの誤字脱字に加えて、文法上の形式、たとえばコンマを入れるとか、入れないとか、文章の始まりは5コマあけるとか、図表についてはフォントを変えよとか、いろいろな注文、指示が成される。テンプレートが用意されていて、そこにコピーペ (Copy and Paste) するとか直接タイプインするとかもできるが、とにかく煩わしい。そうした環境のもと、年間で20編もの論文を掲載するのは並大抵ではできない。赴任してから半年以上になるが、その噂がほぼ本当に近いことを知ることになった。共著者への配慮にも寛大で、受理された論文の掲載通知が共著者にも送付されてくるが、その頻度から、上記の話が嘘で無いことがうかがい知れる。内容的には専門が異なることから詳細について論ずることはできないが、出版社の名前でその学術誌が、名の通った学術誌である事は容易にわかる。本報で強調したいことは、多くの教員が論文掲載数を増やすことに四苦八苦ししている中で、年間20編の論文掲載を継続実行し、惜しげも無く知人や友人を共著者として論文を発表している。筆者はなかなか出来る事ではないと言う評価、見方に変わりつつある。タイでも中央部、南部、北タイ、北部と言った形で、それぞれの地域に存立する大学の教員評価には、日本の設置審議委員に似た人物が任命されている。この委員が採用、昇格、昇級など人事にも口を挟むことになる。かつて日本の大学でもそうであったように、大きな大学の教員にとっては、かつての教え子を送り込むと言った対応が多くあった。しかし地方大学にあってはそうした設置審委員の判断が続く限り、自らの卒業生の行く場がなくなるから不満も出る。このときの判断も、業績が中心になる。業績がほぼ同じであるならば、どうなるかとなれば、当然であるかの如く、委員は自分の教え子を推すのが人情で有り、自然にも思える、しかし業績が掲載論文数で評価され、具体的数で記載されると無理な人事はできなくなる。何某かの理由を付けないとその判断を通すことはむずかしくなる。また、それだけにとどまらず教員を審査する側の学術活動に比して審査される側の教員の掲載論文数が圧倒的に上回るとなると、少々恥ずかしい位置にも立たされる、掲載論文数とその質と量により評価されることに異論は無いが、質的な評価にはいささか異論を唱える教員も居る。しかし質については評価が難しく、掲載された学術誌のレベル、知名度、インパクト・ファクターなどに加えて、学会賞を受賞したとか、表彰を受けたとかがその質的評価になろう。筆者があらためて気付いたことは、質的に高い論文を書くことは重要であるが、その前に学術研究活動をしている事を示す一端が掲載論文とする考えも成り立つ。圧倒的な掲載論文数があれば、誰も何も言わなくなる、あるいは言えなくなる。質がどうのといっても然るべき学術誌に掲載されていれば質についてもどうこう言えなく

なる。筆者の信条のひとつに、「まずは圧倒的作業量で示す。量をこなせば質も徐々に向上する」と言うのがある。ぐたぐた文句を言う前に、まずは圧倒的な作業量を示せと言うことである。これに類する話は、MLBで活躍したイチローの例がある。移籍後10年間数々の新記録を作り、シーズン200安打を成し遂げた偉業は語り継がれるであろう。また有名画家のピカソは90年間の間に成し遂げた仕事の量は、まさに圧倒的で、一日当たり換算すると400点にも上る。偉業を成し遂げた偉人は、誰もが驚く圧倒的な量をこなしている。同時にその状況を絶えることなく継続している。ここで取り上げた教員が果たしてどの様に考えて居るかは分からないが、将来的に偉業を成し遂げる可能性は少なくない。また彼のこうした行為、言動、挙動、活動が周囲の教員に大きなインパクトと影響をもたらしていることも事実である。共著者に加えてもらって喜んでいる間は気がつかないが、その状況が長く続くと、果たして自分は共著者として、このままで良いのかと思うようになるのではと考えるからである。普通の間人ならば「いつまでもおんぶに抱っこ」ではいたたまれなくなるのが一般的では無かろうか。筆者が自分の事を比較に出して話をするつもりはないが、若いときには、その様な一時期があっても良いのではないかと、否あるべきであると考えている。若き教員の圧倒的活動、作業量が周囲の教員にも良い影響と刺激を与えている。大学教員の一種の意識改革につながるのかも知れない。

年間20編の掲載論文数であれば5年で100編、10年で200編となる。聞くところによれば彼の身分(職階)は講師のようであるが、順調にいけば助教、准教授が一般的プロセスである、しかし2階級昇格と言う可能性もある。掲載論文数が不足で昇進、昇格できない教員が多い中だけに異色の存在である。もちろん彼のすべてが文句の付けようがないほどというのではないが、少なくとも学術研究活動という点で多くの大学教員にグッド・イクザンプル (Good example) を示し、大きな刺激源となっていることは間違いない。筆者に取っても大きな刺激材料になっている。筆者は昨年10月にマエジョ大学に移籍し、かれこれ10ヶ月になろうとしている。1年間の契約でどれだけのことをしたかと言う、達成度の評価によって契約が終わるか、さらに延長させて貰えるかが決まる。まさか1年間で3編の掲載論文をとと言う事にはならないとは思いますが、十分な実績があるに越したことはない。そうした事も含めて彼は親切にも筆者を共著者として彼の論文に加えてくれている。有り難い話ではあるがいささか申し訳ないと言う気持ちが先行し、提出資料にそうした業績を加える事を躊躇する状況である。彼もタイ人ではなく筆者と同じ外国人という位置づけと長期滞在の就職だけにその頑張りは当然かも知れない。人生に於ける大イベントのひとつである就職に賭ける意気込みが、彼をしてこのような活力を出させていると考えるのは筆者のみであろうか。